

ICTによる音楽科教育の指導と評価（2）

Instruction and evaluation of music education by ICT（2）

（2019年3月29日受理）

小野 文子 太田 正清
Ayako Ono Masakiyo Ohta

Key words：音楽科教育法，鑑賞学習，統計処理，コンピュータ

要 旨

学習指導要領にコンピュータという語が登場するのは，1989年（施行は1993年4月）の中学校技術・家庭科である。音楽科に登場するのは，1998年である。それは，第3指導計画の作成と内容の取扱い2第2の内容の指導について，次の事項に配慮するものとするであった。その中の(11)各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては，「適宜，自然音や環境音などについても取り扱うとともに，コンピュータや教育機器の活用も工夫すること」であった。

筆者が行ったのは，鑑賞学習の成果を測る教師が行うコンピュータを活用した統計的手法によるものである。それまで中学校音楽科における鑑賞学習に関する研究は多く行われたが，学習成果を測る方法は生徒自身の自己評価，生徒同士の相互評価，教師の生徒評価等による主観のぶつかり合いが主であった。

しかし，学校教育にもコンピュータが活用されるようになり，この分野での活用も一気に開花した。但し，教科は理数系が主であった。

筆者は，教育分野の統計処理に関し，コンピュータ登場以前は手作業で行っていた。これには膨大な時間を必要とした。本研究は筆者が1995年9月から1996年3月にかけて岡山大学教育学部附属中学校において行った音楽鑑賞におけるコンピュータを活用した統計処理について考察を深めたものである。

I. スコアを活用した聴取・鑑賞学習

1. 研究主題設定の理由

これは，下記(1)(2)(3)により，聴取・鑑賞学習を通して「自己の音楽的個性を自覚していく生徒を育てる指導法に関する研究」である。

(1) この研究は，生徒自身が音楽鑑賞学習(活動)をしている自分をよく意識し，それを評価できる自分を創り出したいと考えた。聴取・鑑賞活動に関していえば，自分は「どのように聴き取ったのか」が重要なことなのである。このことからすれば，音楽科においては自己評価自体が学習活動であると考えてよく，自己評価が極めて

重要な意義をもつことになってくる。

(2) 音楽作品鑑賞の目的は，音楽作品の美しさを味わうこと，即ち，音楽美の享受にある。この音楽美の享受は，聴く生徒個人の内面に生ずるものであり，そのあり方も個々の生徒によって様々である。そのため，同時に同じ曲を聴いたとしても，全ての生徒がその曲について同一の価値感情を持つとは限らない。こうしたことから音楽鑑賞は極めて主観的な行為ということになると考えられる。このことからして，鑑賞学習における評価観は学習者の「主観を磨くこと」を目指したものとなってくる。教師の評価や相互評価は，学習者である生徒個人の主観を磨くことに資することができて，はじめて妥当性

があったといえるだろう。

また、評価に関して教師に課せられているのは、一方的に教師の評価を学習者である当該生徒にフィードバックすることではあるまい。また、客観性（相互の公共的な結果の一致）のみを目指すことでもないだろう。といって、結果の一致を放棄し、曖昧さを容認することでもないだろう。生徒個人が現在もっている「価値観に伴う感情」を認識し、理解し、今後「より高い価値を求めようとする感情」へと向かわせようとするのである。ここでは、一致させることを求めるのではなく、学習者本人である個々の鑑賞生徒の自己評価とクラス鑑賞における相互評価と教師による評価から互いに磨き合うことを目指した「共につくる評価」が必要となろう。

（３）今回の聴取・鑑賞学習は、聴取・鑑賞の主体者である生徒の楽曲嗜好から楽曲選定（「学習課題」の選択）を実施したい。生徒達の楽曲受容調査から、生徒は、自分の好みの楽曲を通しての聴取・鑑賞は単に感覚的・皮相的レベルの聴取活動に留まる程度の浅い段階ものではなく、楽曲を構成しているリズム、メロディー、ハーモニー、音色、テクスチャー、調性、形式、ダイナミックス等を聴取、価値判断、価値評価、吟味した後、享受するという深いレベルで行うことができるからである。

2. 研究主題設定の理由

生徒の嗜好に基づいた楽曲を素材とした聴取・鑑賞学習を通して、自己の音楽的個性を自覚していく生徒を育てる指導法に関する研究を行う。

3. 研究仮説

生徒に楽曲構成要素に着目させた鑑賞学習を行い、各自の楽曲に対する主観を磨かせることを通して、「主体的な学習」における「学習課題」の価値の自覚の段階、「学習課題」の解決の自己評価の段階を強化した活動を行えば、自己の内面に存在させている音楽的想いを意識したり、高めることを自己要求する生徒が育ち、「主体的な学習」における学習の深化・拡充を図ることができ、鑑賞学習を通して自己の音楽的個性を自覚していく生徒を育成するのに有効である。

4. 研究計画

（１）研究の対象

岡山大学教育学部附属中学校2学年生徒200名

（２）研究の領域

鑑賞学習（生徒の学習受容調査から嗜好に基づいた楽曲を使用しての鑑賞学習を通して行う）

（３）研究の日程

平成1995年9月から平成1996年3月

10月～11月前調査（楽曲受容調査、鑑賞学習に関わる知識・技能の習得に関する調査、鑑賞学習における意欲・態度の伸長に関して）

10月～11月 授業実施（記述式による自己評価）

11月 事後調査（楽曲受容調査、音楽学習に関わる意識・技能の習得に関する調査、鑑賞学習における意欲・態度の伸長に関して）

12月～2月 事前・事後調査集計、分析、考察、記述式による調査の分析と考察

3月 研究のまとめ

5. 検証について

（１）「楽曲受容調査」から生徒の楽曲嗜好を調査・分析・考察する。

（２）「鑑賞学習に関わる知識・技能の習得に関する調査」の事前から事後への知識・技能の習得の状況を調べる。

（３）「鑑賞学習における意欲・態度の伸長に関して」の事前から事後調査への意識の変容を検証・考察する。

（４）「音楽楽曲における生徒の好みの活動に関して」から鑑賞学習と歌唱、器楽、楽典学習、コンピュータ・ミュージックとの相関を検証・分析・考察する。

6. 研究の経過

ースコアを活用した聴取・鑑賞学習の展開ー

（１）聴取・鑑賞学習に使用した楽曲

今回の学習で使用した楽曲は、生徒たちが比較的共感を覚えやすいと思われた次の7曲であった。（学習前後におけるこれら7曲についての楽曲受容状態は後ページで詳述した。）楽曲は全て管弦楽曲である。

表1 聴取・鑑賞学習に使用した楽曲

- ① 歌劇「フィガロの結婚」序曲より（モーツァルト）サー・ゲオルグ・ショルティ指揮、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭管弦楽団（1991年イギリスにて制作、POLL-1085/6、ポリドール）
- ② 歌劇「セビリヤの理髪師」序曲（ロッシーニ）サー・ネヴィル・マリナー指揮、アカデミー・オブ・セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ（録音：1976年12月ロンドンPHCP-10109PHI）
- ③ 喜歌劇「軽騎兵」序曲（スッペ）ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団（ライブ録画：年西ベルリン“フィルハーモニア” VLI-82152ポリドール）
- ④ ハンガリー舞曲第5番（ブラームス）ローラント・バーダー指揮、クラコウフィルハーモニー管弦楽団（1990年制作、MMD1017、KKメディアリング制作、KKポリドール協力）
- ⑤ 交響詩「フィンランディア」（シベリウス）ローラント・バーダー指揮、クラコウフィルハーモニー管弦楽団（1990年制作、MMD1017、KKメディアリング制作、KKポリドール協力）
- ⑥ 行進曲「威風堂々」作品39から第1番ニ長調（サー・エドワード・エルガー）レナード・バーンスタイン指揮、BBC交響楽団（録音：1982年4月ロンドン、POCG-9592、ポリドール）
- ⑦ バレエ音楽『グイーヌ』から「剣の舞」（ハチャトゥリアン）小澤征爾指揮、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団（1993年6月21日、ベルリン・ヴァルトビューネにて収録、PILC-1167パイオニア）

（2）スコアの楽器配列・楽器名について学ぶ

スコアを追いながら、楽曲を聴取・鑑賞するためにスコアの楽器配列を理解させる必要がある。スコアを使い、楽曲配列は上から木管、金管、打楽器、弦楽器になっていること、また、各セクションは高音楽器から低音楽器の順に配列されていることを理解させた。

また、楽曲名を理解させる必要があることから1977年発行の国安愛子著「事典形式音楽概論」（音楽之友社）から、オーケストラで使用される楽器名を英語、イタリア語、ドイツ語で調べさせた。（通常、スコアの楽器名はイタリア語で書かれているが、時にドイツ語表記のものがあるので、ドイツ語の楽器名についても学習させた）また、移調楽器についても学習させた。

（3）速度標語について学ぶ

スコアを理解して読んでいく上では、教科書に記載されている速度標語より多くのものを学習しなければならない。そこで、これも国安の「事典形式音楽概論」（音楽之友社）を使用して速度標語について学習させた。

（4）自己評価カードによる楽曲聴取・鑑賞活動

スコアを活用して何回か聴取を重ねた後、表2音楽鑑賞学習自己評価カードを使用し、聴取・鑑賞している楽

曲について、構造を調べたり、聴きやすさの度合いを自己評価させた。

7. 結果と考察

（1）アンケートⅠ（鑑賞学習における知識・技能の習得に関して）

この能力調査を鑑賞学習の前・後実施し、知識・技能の伸びを考察する。

表2 鑑賞学習における知識・技能の習得に関して

音楽鑑賞学習についてのアンケート（1）	
1995年 月 日実施 年 組 番 氏名（ ）	
このアンケートは、成績には関係しませんので、あなたの考えを気軽に答えてください。①から⑮のそれぞれについて5～1のいずれかを選び、○で囲んでください。	
5…とてもそうである	
4…あそうである	
3…どちらともいえない	
2…まあそうでない	
1…とてもそうでない	
①クラシック音楽を聴くのは好きである。……………（5 4 3 2 1）	
②オーケストラで使われている楽器の中で、何か一つぐらい演奏できるようになりたい。……………（5 4 3 2 1）	
③音符や休符、音楽記号の意味は、ほとんど理解している。……………（5 4 3 2 1）	

- ④音楽用語で『cresc.』の説明ができる。…………(5 4 3 2 1)
- ⑤音楽用語で『pocodim.』の説明ができる。…………(5 4 3 2 1)
- ⑥音楽用語で『pp.』の説明ができる。…………(5 4 3 2 1)
- ⑦音楽用語で『vicate.』の説明ができる。…………(5 4 3 2 1)
- ⑧音楽用語で『presto.』の説明ができる。…………(5 4 3 2 1)
- ⑨音楽用語で『ソナタ形式』の説明ができる。……(5 4 3 2 1)
- ⑩楽器の名前で『Flauti』は何を表しているのかわかる。
…………(5 4 3 2 1)
- ⑪楽器の名前で『Corni』は何を表しているのかわかる。
…………(5 4 3 2 1)
- ⑫楽器の名前で『Timpani』は何を表しているのかわかる。
…………(5 4 3 2 1)
- ⑬楽器の名前で『Contrabasso』は何を表しているのかわかる。
…………(5 4 3 2 1)
- ⑭下の楽譜(スコア)の響きが想像できる。…………(5 4 3 2 1)

⑮下の楽譜(スコア)の響きが想像できる。…………(5 4 3 2 1)

iv

アンケートをとった人数は男子42名, 女子40名 (2クラス分) である。各問とも5段階で回答を求めた。5と回答した生徒には5点を与え集計した。男女とも合計得点により2グループに分けた。男子上位群 (21名), 男子下位群 (21名), 女子上位群 (20名), 女子下位群 (20名) である。この4グループは, アンケートⅡ (鑑賞学習における楽曲受容の状態) の学習前から学習後への伸びをみるときの軸分けと, アンケートⅢ (鑑賞学習における意欲・態度の伸長) の自己評価に関わる因子の学習前から学習後への伸びをみるときの軸としても使用した。

(2) アンケートⅠ (鑑賞学習における知識・技能の習得に関して) の学習前, 学習後の比較

〔①～⑮は調査問題番号, 前後の数字はグループ男子上位群 (21名), 男子下位群 (21名), 女子上位群 (20名), 女子下位群 (20名) 5の5段階回答における平均値を, 率の数字は学習前から学習後への知識・技能の習得の伸び率を, 判の***は調査時期による平均点の有意差検定 (t 検定) の有意水準0.1%, **は1%, *は5%を表す〕

表3 鑑賞学習における知識・技能の習得に関しての学習前, 学習後の比較

男子上位群		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	計
	前	3.90	4.29	4.00	3.38	2.14	4.14	2.38	2.05	3.29	4.57	3.29	4.62	4.76	3.52	3.71	3.60
	後	3.71	4.24	3.76	3.81	2.81	4.43	2.62	2.90	4.19	4.43	3.48	4.29	4.71	3.24	4.19	3.79
	率	0.95	0.99	0.94	1.13	1.13	1.07	1.10	1.41	1.27	0.97	1.06	0.93	0.99	0.92	1.13	1.05
	判				*	**			*	***						**	

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	計
男子下位群	前	3.19	3.76	2.90	1.18	1.24	3.90	1.29	1.24	2.05	4.00	1.43	2.86	4.19	1.71	2.00	2.50
	後	3.57	4.10	3.81	2.48	1.81	4.19	1.67	1.86	3.05	4.33	2.52	3.81	4.48	2.38	2.76	3.05
	率	1.12	1.09	0.97	1.37	1.46	1.07	1.29	1.50	1.49	1.08	1.76	1.33	1.07	1.39	1.38	1.22
	判	*			*	**		**	**	***		***	**		**	*	

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	計
女子上位群	前	4.29	4.24	4.10	3.57	2.48	4.14	2.10	2.00	3.62	4.43	3.24	4.48	4.57	3.48	3.62	3.80
	後	4.14	4.14	3.57	3.67	2.67	4.29	2.48	3.05	4.05	4.62	3.48	4.71	4.71	4.10	4.48	4.08
	率	0.97	0.98	0.87	1.03	1.15	1.04	1.18	1.53	1.12	1.04	1.07	1.05	1.03	1.18	1.24	1.07
	判								**	*				**	***		

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	計
女子下位群	前	3.43	3.86	3.14	2.52	1.52	3.62	1.19	1.43	2.48	3.43	1.76	3.52	4.14	2.29	2.43	2.85
	後	3.90	4.00	3.05	2.95	1.86	3.86	2.05	2.05	3.14	4.29	2.95	4.24	4.43	2.62	3.57	3.43
	率	1.14	1.40	0.97	1.17	1.22	1.07	1.72	1.43	1.27	1.25	1.68	1.20	1.26	1.14	1.47	1.20
	判	**				*		***	**	**	**			***			

アンケートⅠは、鑑賞学習における知識・技能の習得に関するものである。質問は15項目。クラシック音楽の嗜好を尋ねたもの①②、鑑賞学習における知識・理解事項に関するもの③～⑬11項目、スコアリーディングの技能に関するもの⑭⑮である。

この鑑賞学習における知識・技能の習得に関して、学習前から学習後への伸長を総じて言えば、男女とも下位群の方が上位群よりも学習前から学習後への知識・技能の習得率の伸びは顕著である。以下、有意差をもって伸長した項目について述べる。

〔①クラシック音楽を聴くのは好きである〕については、男女とも下位群に有意差をもって伸長が認められた。③～⑬で有意差をもって伸長が認められたものは、次のものである。〔④音楽用語で『cresc.』の説明ができる〕であった。男子上位群、男子下位群に有意差ありの伸長が認められた。〔⑤音楽用語で『poco dim.』の説明ができる〕については、男子上位群、男子下位群に有意差ありの伸長が認められた。〔⑦音楽用語で『vivace』の説明ができる〕は、男子下位群、女子下位群に有意差ありの伸長が認めた。〔⑧音楽用語で『presto』の説明ができる〕と〔⑨音楽用語で『ソナタ形式』の説明ができる〕については、4グループ全てに有意差をもった伸長が認

められた。〔⑩楽器の名前で『Flauti』は何を表しているのかわかる〕は、女子下位群に有意差ありの伸長が認められた。〔⑪楽器の名前で『Corni』は何を表しているのかわかる〕、〔⑫楽器の名前で『Timpani』は何を表しているのかわかる〕については、男子下位群、女子下位群に有意差ありの伸長が認められた。

（3）アンケートⅡ（鑑賞学習前後における楽曲受容の状態）

聴取・鑑賞学習前と学習後に次の7曲について楽曲受容の状態を調査し、2種類の軸分け〔（1）鑑賞技能に関わる知識・技能得点（アンケートⅠ・事前）、（2）自己教育指導検査（SET）の学習領域の得点〕により男女4グループの変容をみることにした。使用楽曲は次の7曲。①フィガロの結婚、②セヴィラの理髪師、③軽騎兵序曲、④ハンガリー舞曲第5番、⑤フィンランディア、⑥威風堂々第1番、⑦剣の舞である。

表4 音楽鑑賞学習についてのアンケート（2）

音楽鑑賞学習についてのアンケート（2）	
2年	組 番 氏名()
これから、①から⑦まで7曲について、それぞれの曲のはじめの部分を聴いてもらいます。それぞれについて、その曲をどの程度鑑賞してみたいと思うか、次の5段階から選び、ひとつを○で囲んでください。	
【5：とても鑑賞したい 4：まあ鑑賞したい 3：どちらとも言えない 2：まあ鑑賞したくない 1：とても鑑賞したくない】	
①	【5 4 3 2 1】
②	【5 4 3 2 1】
③	【5 4 3 2 1】
④	【5 4 3 2 1】
⑤	【5 4 3 2 1】

（4）アンケートⅡ（鑑賞学習における楽曲受容の状態） 下位群21名）の5段階回答における平均値を、率の数字は学習前から学習後への楽曲受容の伸び率を、判の**は調査時期による平均点有意差検定（t検定）の有意水準0.1%，**は1%，*は5%を表す]

鑑賞学習に関わる知識・技能の得点（アンケート、事前）を軸として

〔①～⑦は調査楽曲番号、前後の数字は各グループ（男子上位群21名、男子下位群21名、女子上位群20名、女子

表5 鑑賞学習前後における楽曲受容の状態

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
男子上位群	前	4.19	3.81	4.10	4.14	2.52	3.95	4.23	3.85
	後	4.33	3.95	3.90	3.38	3.57	4.14	4.43	3.96
	率	1.03	1.04	0.05	0.82	1.42	1.05	1.05	1.03
	判					**			

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
男子下位群	前	3.57	3.29	3.52	3.76	2.95	3.38	3.67	3.45
	後	3.62	3.67	3.62	3.48	3.29	4.19	3.81	3.67
	率	1.01	1.12	1.03	0.93	1.12	1.24	1.04	1.06
	判							*	

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
女子上位群	前	4.15	3.20	4.40	4.35	3.25	3.85	4.40	3.94
	後	4.00	3.60	3.85	3.65	3.45	4.35	4.10	3.86
	率	0.96	1.13	0.88	0.84	1.06	1.13	0.93	0.98
	判								

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
女子下位群	前	4.10	3.65	4.05	4.40	3.00	3.50	4.40	3.87
	後	3.70	3.60	3.80	3.96	3.45	4.00	4.35	3.84
	率	0.90	0.99	0.94	0.90	1.15	1.14	0.99	0.99
	判								

（5）SETの学習領域の得点（課題思考、学習の仕方、自己評価の得点合計）を軸として

〔①～⑦は調査楽曲番号、前後の数字は各グループ（男子上位群21名、男子下位群21名、女子上位群20名、女子

下位群21名）の5段階回答における平均値を、率の数字は学習前から学習後への楽曲受容の伸び率を、判の**は調査時期による平均点有意差検定（t検定）の有意水準は0.1%、**は1%、*は5%を表す〕

表6 SETの学習領域の得点（課題思考、学習の仕方、自己評価の得点合計）を軸として

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
男子上位群	前	4.05	3.67	3.86	4.00	2.52	3.76	4.10	3.71
	後	4.10	4.05	3.81	3.52	3.67	4.38	4.29	3.97
	率	1.01	1.10	0.99	0.88	1.46	1.16	1.05	1.07
	判					**	*		

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
男子下位群	前	3.71	3.43	3.76	3.90	2.95	3.57	3.81	3.59
	後	3.86	3.57	3.71	3.33	3.19	3.95	3.95	3.65
	率	1.04	1.04	0.99	0.85	1.08	1.11	1.04	1.02
	判								

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
女子上位群	前	4.05	3.70	4.30	4.25	3.15	3.85	4.40	3.96
	後	3.90	3.90	4.10	3.90	3.75	4.15	4.25	3.99
	率	0.96	1.05	0.95	0.92	1.19	1.08	0.97	1.01
	判								

		①フィガロ	②セヴィラ	③軽騎兵序	④ハンガ5	⑤フィンラン	⑥威風堂々	⑦剣の舞	計
女子下位群	前	4.20	3.15	4.15	4.50	3.10	3.50	4.40	3.86
	後	3.80	3.30	3.55	3.70	3.15	4.20	4.20	3.70
	率	0.90	1.05	0.86	0.82	1.02	1.20	0.95	0.96
	判								

アンケートⅡは、鑑賞学習前後における楽曲受容の状態を調査したものである。まず、軸分けをア「鑑賞学習に関する知識・技能の習得（アンケートⅠ・事前）」にとったものの結果をみていく。この結果は、男子上位群と男子下位群が学習前から学習後へと受容の状態を上げている。女子上位群と女子下位群はいずれも受容状態を下げている。受容状態を上げた男子上位群の楽曲の中でも⑤「フィンランディア」については有意差をもって受容状態を上げている。男子下位群では、⑥「威風堂々」は有意差をもって受容状態を上げている。また、楽曲について

みていくならば、⑤「フィンランディア」⑥「威風堂々」が学習前から後へと受容状態を上げている。

次に、イ「SET（自己教育力指導検査）の学習領域の得点」に軸分けしたもについてみていく。この軸分けでは、男子上位群、下位群、女子上位群が学習前から後へとその状態を上げている。女子下位群は下げている。中でも、男子上位群では⑤「フィンランディア」と⑥「威風堂々」では、有意差をもって受容状態を上げている。また、楽曲についてみていくならば、この軸分けにおいても⑤「フィンランディア」と⑥「威風堂々」は4群と

も受容状態を上げている。

(6) アンケートⅢ(鑑賞学習における意欲・態度の伸
長に関して)

このアンケートでは、主体的に鑑賞学習を行おうとす

る意欲・態度の各因子抽出し、学習まえから後において

それら意欲・態度の伸長がどの程度かを検証しこ考察を
加える。

表7 音楽学習についてのアンケート

2年	組	番	氏名()
<p>このアンケートは、音楽鑑賞の授業や学習についてあなたの考えを聞くものです。成績とは関係しません。次の質問について、あなたの気持ちにいちばん近いものを(5 4 3 2 1)からひとつ選び、○で囲んでください。</p> <p>(5 : よくあてままる 4 : まああてはまる 3 : どちらともいえない 2 : あまりあてはまらない 1 : ほとんどあてはまらない)</p>			
①	音楽鑑賞の学習は楽しみである	(5 4 3 2 1)
②	音楽鑑賞の仕方を理解しようとするほうだ	(5 4 3 2 1)
③	音楽鑑賞する力を伸ばそうとするほうだ	(5 4 3 2 1)
④	音楽鑑賞作品のレパートリーをふやしたいと思う	(5 4 3 2 1)
⑤	鑑賞している自分を自己評価しようとするほうだ	(5 4 3 2 1)
⑥	友だちや先生にアドバイスされるとよりよい鑑賞ができる	(5 4 3 2 1)
⑦	鑑賞は自分から進んでしようとする	(5 4 3 2 1)
⑧	友だちの助言は素直に聞こうとするほうだ	(5 4 3 2 1)
⑨	自分の欠点や弱点は素直に認めるほうだ	(5 4 3 2 1)
⑩	何回も粘り強く聴いて、よい鑑賞をしようとする	(5 4 3 2 1)
⑪	鑑賞の途中で困難に出会っても最後まで聴き通そうとする	(5 4 3 2 1)
⑫	鑑賞するときはいつも工夫した聴き方をしようとする	(5 4 3 2 1)
⑬	鑑賞中に困ったとき、「もっとしっかり！」と励ます声を心の中に聞くことがある	(5 4 3 2 1)
⑭	鑑賞中にこれはまずいと思ったらすぐ聴き方を改めようとする	(5 4 3 2 1)
⑮	鑑賞している自分をみているもう一人の自分を意識することがある	(5 4 3 2 1)
⑯	自分はその曲をどのように鑑賞したかを友だちに説明しようとするほうだ	(5 4 3 2 1)
⑰	自分にふさわしい鑑賞の仕方を身に付けようとしている	(5 4 3 2 1)
⑱	友だちや先生に「よい鑑賞ができたね！」と認められるとさらに頑張って鑑賞したい	(5 4 3 2 1)
⑲	自分の鑑賞の仕方を自分で評価するときは、どんなことを評価すればよいかを考える	(5 4 3 2 1)
⑳	自分の鑑賞の仕方を自分で評価するときは、自分なりの基準を考えようとする	(5 4 3 2 1)
㉑	自分の鑑賞への評価は、友だちの平均的な出来具合を目安に評価しようとする	(5 4 3 2 1)
㉒	鑑賞への自己評価は、友だちの意見や考え方をもとにすることが多い	(5 4 3 2 1)
㉓	鑑賞への自己評価は、いつもいろんな角度からしようとするほうだ	(5 4 3 2 1)
㉔	自分の鑑賞への評価は、いつも自分の前回の評価を目安に評価している	(5 4 3 2 1)
㉕	自己評価するとさらに向上したい気持ちになる	(5 4 3 2 1)
㉖	いつも私は学習課題(鑑賞)が達成できたかどうか自分で判断しようとする	(5 4 3 2 1)
㉗	音楽鑑賞がうまくいかないときはいつもその原因を考えようとする	(5 4 3 2 1)
㉘	私は、自分の鑑賞する力がどの程度なのか自分で判断しようとする	(5 4 3 2 1)
㉙	自己評価すると自分の次にやるべき鑑賞の課題がよく理解できる	(5 4 3 2 1)

⑩	自分で自分を評価すると自信を持つことができる	(5 4 3 2 1)
⑪	鑑賞後、私はいつも自己評価をしっかりとし、次の鑑賞に向かおうとする	(5 4 3 2 1)
⑫	しっかりと自己評価すると新たな鑑賞にも頑張るぞという気持ちがある	(5 4 3 2 1)
⑬	楽しかった鑑賞のあとは、またその曲を聴いてみようと思う	(5 4 3 2 1)
⑭	班で話し合って曲の構造や仕組みを調べておくとう鑑賞しやすくなる	(5 4 3 2 1)
⑮	簡単に構造や仕組みのわかる曲を鑑賞してみたい	(5 4 3 2 1)
⑯	聴いたこともない曲を聴いてみたい	(5 4 3 2 1)
⑰	その曲を聴いて「よいなあ！」と思ったとき、なぜ自分はそう思うか調べてみたい	(5 4 3 2 1)
⑱	自分の好きな曲を鑑賞するのは、面白いと思う	(5 4 3 2 1)

主体的に鑑賞学習を行おうとする意欲・態度の各因子を抽出するために、これらの諸過程に対応させて作成したアンケートを実施し、因子分析を行った。共通性の因子1を除き、6個の因子が検出された。①④⑦⑨⑩⑬⑮から検出されたものを【因子2・学習意欲】、⑤⑪⑫⑬⑯⑲から検出されたものを【因子3・向上】、⑧⑨から検出されたものを【因子4・アフターケア】、③⑦から検出されたものを【因子5・自己推進】、⑥⑭⑲から検出されたものを【因子6・自己方向づけ】、⑫から検出されたものを【因子8・向上欲求】と名付け、これら主体的に鑑賞学習を行おうする意欲・態度にかかわる6因子に対する意識が4群（男子上位群、男子下位群、女子上位群、女子下位群）において学習前から後へとどのように伸長していくかを考察した。

（7）鑑賞学習に関わる知識・技能の得点（アンケートⅠ・事前軸とした）鑑賞学習における意欲・態度の伸長

表8 鑑賞学習における意欲・態度の伸長

		事 前	事 後	判 定
学習意欲	男子上位群	3.9	4.1	
	男子下位群	3.7	3.9	
	女子上位群	4.3	4.2	
	女子下位群	3.9	4.0	

		事 前	事 後	判 定
向上	男子上位群	3.9	4.1	
	男子下位群	3.7	3.9	**
	女子上位群	4.3	4.2	
	女子下位群	3.9	4.0	

アフター ケア		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.7	3.8	
	男子下位群	3.2	3.6	**
	女子上位群	3.7	3.8	
	女子下位群	3.0	3.5	*

自己推進		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.1	3.3	
	男子下位群	2.8	3.2	**
	女子上位群	3.5	3.2	
	女子下位群	3.1	3.2	

自己方向 づけ		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.4	3.6	
	男子下位群	3.0	3.4	**
	女子上位群	3.3	3.3	
	女子下位群	3.0	3.3	*

向上欲求		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.1	3.5	
	男子下位群	2.6	3.0	
	女子上位群	3.3	3.1	
	女子下位群	2.6	3.1	**

（8）SETの学習領域の得点（課題意識、主体的思考、学習の仕方、自己評価の得点合計）を軸とした鑑賞学習における意欲・態度の伸長

表9 SETの学習領域の得点を軸とした鑑賞学習における
意欲態度の伸長

学習意欲		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.7	4.0	*
	男子下位群	3.9	4.0	
	女子上位群	4.2	4.2	
	女子下位群	4.0	4.1	

向 上		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.0	3.3	
	男子下位群	2.9	3.2	*
	女子上位群	3.2	3.3	
	女子下位群	2.7	2.9	

ア フ タ ー ケ ア		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.6	3.8	
	男子下位群	3.3	3.5	
	女子上位群	3.8	4.1	
	女子下位群	3.0	3.2	

自 己 推 進		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.7	4.0	*
	男子下位群	3.1	3.3	
	女子上位群	3.5	3.6	
	女子下位群	3.0	2.9	

自 己 方 向 づ け		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	3.3	3.7	*
	男子下位群	3.0	3.3	*
	女子上位群	3.4	3.6	
	女子下位群	2.9	3.0	

向 上 欲 求		事 前	事 後	判 定
	男子上位群	2.9	3.4	*
	男子下位群	2.9	3.0	
	女子上位群	3.4	3.5	
	女子下位群	2.6	2.7	

(9) アンケートⅣ 鑑賞学習と歌唱、器楽、楽典、コンピュータ・ミュージックとの相関関係

鑑賞学習と歌唱、器楽、楽典、コンピュータ・ミュージックとの相関関係を調査した。軸は2種類（知識・技能の得点によるものとSETの学習領域の得点によるもの）を設けた。結果は、2軸とも男子下位群に鑑賞は楽典とコンピュータ・ミュージックに強い正の相関関係を示し、歌唱と器楽には負の相関関係を示した。

8. 研究のまとめと今後の課題

本研究は、男子生徒に有効であった。特に、男子下位群の生徒にあつては、“鑑賞は楽典とコンピュータ・ミュージックに強い正の相関関係にあり、歌唱と器楽には負の相関鑑関係にあることがわかった”からも表現活動は苦手であっても、鑑賞に学習の意義を見出そうとしている男子生徒も多いことが伺われる。楽曲に関しては、鑑賞を危惧していた「フィンランディア」は教材として使えることがわかった。一方、課題として残ったことは、今回使用した楽曲は7曲とも管弦楽曲であったため男子生徒に有効性がみられたのかもしれない。ピアノ曲等の独奏曲を鑑賞させると女子生徒には有効性がみられるかもしれない。今一つ、個々の生徒の受容状態の変容や推移を測定する方法（調査問題、調査方法等等）と検証方法を検討することである。

参 考 文 献

- 1) 小山真紀 (1993)「音楽科における自己評価の重要性」音楽教育学第25号
- 2) 住本義章 (1990)「自己評価過程の分析と評価技法の開発」図書文化社
- 3) 国安愛子 (1984)「事典形式音楽概論」音楽之友社
- 4) 音楽之友社(1982)「最新名曲解説全集」音楽之友社
- 5) 北尾倫彦 (1990)「教研式 自己教育力指導検査」図書文化社
- 6) 脇本和昌ほか (1984)「パソコン統計解析ハンドブックⅡ多変量解析編」共立出版株式会社
- 7) 岡山大学教育学部附属中学校 (1990, 1992, 1994)「研究 紀要20, 21, 24号」